

「読書会をしよう！」キャンペーン継続中 阿部公彦

今月も読書会方式で。先月と同じく参加者は①ちよっとやな感じの東大生・コージ(ⅡK)。②吉田。主婦。野球を見ながら編み物をするのが趣味(ⅡY)。③厚木から来たあつちゃん。ゴスロリ系でホラー好き。こう見えて一番年上(ⅡA)。タイトルの後の数字は三人の投票でつけた点数(各持ち点10点)。K「えっと、今月は作品が沢山で慌たしいです」Y「人が死ぬ話が多いわ。あたしが一番印象的だったのは高橋弘希『指の骨』(新潮)28点。太平洋戦争中の南方で、日本軍は薬も尽きた中、栄養失調や病気のせいで闘つてもいないのに兵隊がどんどん死んでいく。その様子が描かれるのだけど、主人公は自分の物語よりも、外に流れる圧倒的な力のようなものを丹念にとらえる。内容は凄惨だけど、とにかく文章が端正で、しかも淡々としていながら微妙な濃淡やうねりがうまく出てる。追い詰められていく救いのない話なのに、変

な感じなんだけど、浄化される気分になった」K「吉田さんが褒めそうだったと思った。少し古風だけど、たしかにずば抜けて書ける人だね。でも、動機は何なのだろう。この人、どうしてこれ書いたの？」Y「動機なんて、そう簡単にわかるものじゃないのよ。むずむずするものだけかもしれないし、別のことも」A「あたしも、よくわかんないけどすごいと思います。あ、人が死ぬといえ、上村亮平『みずうみのほうへ』(すばる)27点はお父さんが船上で行方不明になるのがきっかけです。小説ってわからない部分が多くて、いつも『あたし、頭悪いなあ』って思うんですけど、この小説はわからなくてもなぜか居心地が良くて」K「サイモンの使い方がうまいよね。いやあ、俺もこれは一押し。いかしたムードだけの雰囲気小説かと思っただけ、ひねりも効いている。賢い書き手」Y「たしかにうまい。でも、うますぎて鼻につくところ

がある。語り手の自意識を感じるのよね。『指の骨』はうまいけど、文章が自意識を超えてる」K「短いけど、俺がけっこう好きだったのは樋口毅宏『断罪』(文藝)27点。いきなり癌と死の話から始まる私小説。実在の人物が次々に出てくるけど、そんなに飛んだ話じゃない。『へいへい、今、あなたの小説読んで感想言っちゃってるよ』とか言いたくなる。この気楽さがいいな。等身大な感じ。すぐそこ感」Y「ふうん。まあ、読ませるけど」A「あたし、ここに出てくる太つちよのチヨちゃん、好きです」Y「なんで？」A「気持ちよくなる。応援しました」K「登場人物がみんないいな。ちよつとしたセリフで、ずばつと。そうそう、私小説といえ、四元康祐『偽詩人抄伝』(群像)27点。俺の知ってる先生は、著者の詩を読むと言いたいことがよくわかるって」Y「いや、詩を読まなくてもストーリーは明白ですよ。それに言いたい

ことって何？」A「筋は、やっぱりそうですかあつって思っただけど、どきどきしました」K「李龍徳『死にたくなったら電話して』(文藝)26点も「死」だ。キヤバ嬢が接近してきて、主人公はずつと警戒してるんだけど、女の子は『無性愛者』とかで、結局行くところまで行っちゃう」Y「これねえ。設定や展開はいかにもで、関西臭ぶぶんだし、前半はだらだらして目を惹かれる所もないんだけど、意外と読めた」A「あたし、ふたりが減びていく最後の教員は感動しました」Y「後半、引つ張られるのは確かね」K「島本理生『夜のまったただなか』(群像)26点、山内マリコ『かわいい結婚』(群像)24点、中山咲『東京宝石箱』(文藝)20点。はどれも若い女性の社会不適応小説」Y「どれもタイトルが今ひとつだけど、島本さんはダメ男との性体験あたりからぐつとしまる。中山さんは全体に手加減してるかな」K「山内さんはもつと毒がありそうな気がしたけど、意外と家事不適応の話を丸く収めてます」Y「コージ君、毒のある女性が好きなの？」K「いえ、別に。毒と言え、木下古栗『股間の大転換』(文藝)25点、四元康祐『目地部長』(文芸)23点、足立陽『島と人類』(すば

る)23点、滝口悠生『泥棒』(群像)23点、青木淳悟『心のレタリング』(新潮)23点、中原昌也『犬のしつけビデオに落し落とし穴』(文藝)23点。はみんな変な話。猛暑の行き過ぎで生ビールに股間を浸すことになった近未来という馬鹿馬鹿しいセッティングを描く木下さんの緻密さが俺はいいと思っただけ」Y「いつもながら、このこだわりは何なのかしらね。滝口さんのは軽く一筆書きみたい。話をつるつると転がす感じ」K「青木さんは連作で、これだけでは何とも。四元さんのものも以前のカエルのと通ずる？」Y「目地にこだわるといっは珍しい視点」A「あたし、中原さん、わかりませんでした」K「話がそれていくんだ。正面から語らない。横へ横へ視点が流れる」A「読みながら、『お前なんかか読むな!』と怒られてる気分になりました」Y「足立さんのは露出狂をめぐる楽しい小説だけど、ほんとに笑える箇所がもつとあつてもよかつたかもね」A「金子薫『アルタッドに捧ぐ』(文藝)22点。もいい話でした。トカゲと植物に癒やされる」Y「これも丸く収めすぎじゃない。ひつかりどころがなかった。そういう意味ではいいしんじ『海賊のうた』(新潮)24点の方が短いけど印象に

残る。読むそばから言葉が消えていくような不思議な感覚」K「佐々木中『神奈備』(文藝)22点。は聖の言葉と俗の言葉の間に神話を浮かび上がらせる試みだ」A「磁石のところがよかつたです」Y「この擬古文みたいなのから始めないといけないの？」A「最果夕ヒ『きみ、孤独は孤独は孤独』(文芸)20点。は、これもいい話とか悲しい話なんですよ。自殺が愛を証明する」Y「もうちょっと設定に緊張感が欲しいかしら。読んでても書き手が作業してる感じがしちゃう」K「そういえば中山智幸『テリートな気分』(文芸)21点。も死の話だ。幽霊が出るのがわかつてる、その間の抜けた感じを描く」Y「ひたすらエスカレーターさせて落ちる、というパターンがいかにパターンなのよね」K「吉田さん、いつもながら苦言が多いな。向井康介『あと一匙』(文芸)24点。はいかが？」Y「はじめは会話がぱつとしないし、語り手が訳知りで割りこんでくるし、『女臭くなつた』みたいな演歌っぽい紋切り型も気になるけど、最後は強引に押し切られた」K「それまるで演歌だよ」A「あの、あたし、こういう演劇青年、すつとく異世界で、ほんとにいいんだあつて思いました」